
川は天鵞絨、月は紫朧

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

川は天鷺絨、月は紫朧

【Zコード】

Z0053C

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

川縁に寝転がる、一人の少年。彼はひどく堅い口調で、地味な高校生だった。ふとしたきっかけで、私と少年は、度々、会うことになる。それこそ、逢瀬のように。

0 ,

私が彼に出会ったのは、静かな春の夜のことだった。

1 ,

星の少ない夜だった。私は、近所の河原を散歩していた。
後ろ手に組んで、ぶらりぶらりと。

明日提出のレポートは、まだ半分も書きあがっていない。気分転換なのか、現実逃避なのかわからないが、机に向かっていることが苦痛だったのは確かだ。

河原沿いの道には満開の桜が並んでいて、外灯に映し出されて随分と綺麗である。

ジーンズのポケットから煙草を取り出して、火を灯す。吸い込んだ紫煙を月に向かって吐き出すと、朧月おぼけつきが出来上がった。淡いそれは、夜桜の儂さに佳く似合つた。

「中々に風流ですね」

その様子をぼんやり眺めていると、ふと足元から声が聞こえた。低いが良く通る男の声だった。

驚き飛び退ると、暗闇から学生服を来た少年がのそりと半身を起こした。近所の高校生だろうか。ひょろりと細長い体躯たいにくと、整つているのにどこか地味な顔立ち。銀縁眼鏡の奥に光る目は理知的だった。

「驚かせてしまいましたね。いやはや、申し訳ない」

少年と形容していいのだろうか。学生服に身を包んではいるが、落ち着いた物腰は大人びている。だが、丁寧な言葉遣いの奥に、

どこか楽しさを噛み殺しているような幼さが見えた。

「夜桜見物、ですか？」

「あ、ああ。まあ、そんなところね」

「今夜は雲もなく、桜も映えるでしょう。やや月明かりの強さが気になつてたのですが、紫煙の朧月というのも、オツですね」
不思議な少年である。口調は古めかしく、取っ掛かりがないように感じるのだが、自然と会話に引き込んでくる。通常ならば関わり合いを避けようとするのだが、つい、今度はこちらから言葉をかけていた。

「少年も、夜桜見物？」

「ええ。尤も、本来は川を眺めにきたので、ついでではありますが」

「ふうん。川、ねえ」

面白いというよりも、奇特である。田の前を流れる川は、眺めるに値するほどのものとは思えなかつた。夜桜のついでに川を眺めていたならば、まだ話もわかるのだが。

「川をぼんやりと眺めながら、物思いに耽るのが趣味でして」
少年はそう言つと、にやりと口元に笑みを浮かべた。余程、その行為が楽しいものであるかのように。

「古風……いや、変わった趣味ね」

「そうですね。まあ、馬鹿の考え方休むに似たり。ぼうっと呆けているだけとも言えますが」

「ま、樂しければ、それでいいんじゃない？」

「ええ。そう思います」

屈託無く言つと、少年はふいと川のほうに身体を向けた。

なんとなぐだが、もう少し彼と話がしたいと思つた。

妙に細長い体躯。整つているのに地味な顔立ち。大人びた仕草の中にある幼さ。律儀な敬語の割に、親しみを覚えてしまうこと。ひどくバランスが悪いようにも思えるのに、全体で捉えると違和感の無い存在となつてしまつ。何よりも、僅かな会話の中でもそれに気付かせることに、興味を覚えた。

「隣、いい？」

「ええ、どうぞ」

少年は相変わらず落ち着いた声で答えた。

「じゃあ、遠慮なく」

彼の隣に座つて、煙草を口こつけた。横田で様子を伺つと、少年も私をいや、私の煙草を見ていた。

「ああ、煙草、駄目?」

「いえ、御心配なく。あまり見ない銘柄だつたので、つこまじまじと眺めてしましました」

「なるほど。確かにマイナード、探すのに苦労するのよね」

ポケットから煙草を取り出して、少年に見せる。黒地に骸骨のマークが描かれているのが特徴の、デスというイギリス製の煙草である。

「ほつ……初めて見ます。なかなか怖いデザインですね」

「ま、百害あって一利なしの毒だから、ある意味一番正しい表記ではあるわね。単純に味が好きなだけなんだけど」

胸一杯に煙を吸い込んで、やはり月にめがけて吐き出す。闇色のベルベッドのような川面に、朧月が映つた。

「一利なし、とも限りませんよ。落ち着きますし、ストレスの解消などの精神的安定。単純に美味しいと感じるなら、それを楽しむのも一種の利と言えるでしょう。最近では、ボケ防止効果があるという学説もあるそうです。勉強がはかどるとも聞きますが……これはやや嘘臭いですね」

へえ、と思わず声が出ていた。美味しいとは感じていたし、落ち着こうと思つて煙草を吸つこともまああつたが、ボケ防止といつのは初めて知つた。

「少年は煙草を吸うの?」

「いえ、僕は。吸いたいと思ったことがないので」

「その割に、良く知つているわね」

「物思い草にでも、と調べたことがあります」

大した理由である。いや、むしろそれだけの理由で調べてしまつのが、大したことだ。

「……そうね。じゃあ、思春期の欲求に対する適応の性格別パターンの類推、とか。どう?」

ふと思いついて、先刻まで詰まっていたレポートのタイトルを挙げてみる。少年は「へ?」と驚いたような声をあげたが、次の瞬間「そうですね」と川面に視線を戻しながら、しばらく眉間に皺を作つていた。

「……確かに、同一視や昇華など、欲求を満たされず、その代替品として行う行動が適応でしたね。そして、どのような性格の人間ならば、どのような適応をするのか。それを自分なりに考察してみる、ということでおよろしいですか?」

「ええ。少し考察してみて」

「……そうですね、ではユングの性格類型から考えて」

少年の半時間ほどの考察は、一時間ほどでレポートに書き写され、翌日の発表で教授から大いにお褒めを受けた。

2 .

桜が散った頃、再び私は河原を散歩していた。

煙草に火を点けて。後ろ手に組んで。

散歩の趣味など無い。レポートに詰まつたわけでもなかつた。ただ、何となくだつた。

ベルベッドの川面や、月明かり。近くの道を走り抜けてゆく車のライト。どこか懐かしい、草や土の匂いに誘われたのかもしけない。「奇遇ですね」

或いは、彼の話が聞きたかつたのかもしれない。

「考え方によつては、桜が最も美しいのは、散つてしまつたときで

はないでしょうか

少年は相変わらず学生服を着ており、丁寧な言葉遣いで語りかけてきた。

「その口元は？」

尋ねながら、深く考えず隣に座る。少年は、にやりと口元だけで笑つた。

「散つてしまつた桜を見て、咲き誇つていた頃を懐かしんでいるとさきに、脳裏に咲いた花が一番、淡く、優しく、故に美しく思えたからです」

闇の中で、幾筋もの滑らかな光の線を描く川。少年はじっとそれを見つめながら、詠つた。^{うた}

彼は詠つていた。節も拍子も無く。ひどく堅い言葉で。そして興味の無い内容でも、ちつとも面白くない口調でも、人を惹きつける理由は、彼が詠つてゐるからかもしねり。

「成程、考え方によつては、か」

「ええ、考え方によつては、です」

ふう、と煙を吐いて空を見る。月は亡かつた。

「春は勿論、夏も、秋も、冬でさえも。考え方ひとつで、桜はいくらでも美しくなります」

少年は、尚も詠つ。

「力強く繁った葉が、きらきらとした木洩れ日を」

「燃えるような、それでいて優しい紅葉を」

「寒さに縮こまることもなく、胎動をうちに秘めて」

「そして、淡く、優しく、故に魅せる花を咲かせる」

少年はそれだけ呟いて、私の顔を見た。

「クサすぎましたか」

恥ずかしそうに、はにかむ。こんな顔も出来るのだと、意外に思いいながらも感心した。ただの鉄面皮というわけではなく、滅多に感情を表に出さないだけらしい。

「なかなか詩人じゃないの」

私もくすりと笑みを漏らして、少年の顔を見る。随分と大人びて
いると思っていたが、こうしたところはやはり高校生である。

「いやはや、お恥ずかしい限りです。詩作の趣味は無いのですが、
ついつい桜の魔力にやられてしまったようですね」

高校生らしいと思つたのも束の間、気が付けばいつもの大人がいた
表情に戻つている。本当に、不思議な少年だ。余所余所しく感じる
はずの敬語も、彼が使うと親しみすら覚える。クサいはずの言葉も、
自然と聞こえる。

「いいんじやない。さつきの、けつこう好きよ。目に見える美しさ
も、うちから感じられる美しさもあるって、素敵なことだと思つわ
よ」

田に見えるものが全てじゃない。だけど、見えないものだけ感じ
よつとするのも勿体ない。少年の詩には、そんなメッセージが込め
られているような気がした。

「そう言つていただけると嬉しいです。いやしかし、貴女もなかな
か詩人ですね」

「あら、そうちしら」

「ええ。とても綺麗な表現をされています」

にこりと、少年が笑つた。

3

河原に出向くことが多くなった。ベルベッドの川面や月明かり。
土や草の匂いに誘われて。そして、少年に会うために。

どうやら少年は毎日来ているわけではないらしく、会えない日も
あつた。そんな日は、彼に倣つて川辺に座り、ぼんやりと色々なこ
とを考えた。取り留めもないことから、時には人生についてまで。
三日間通い詰めて、会えないと思っていたら、対岸にいたこともあ
つた。

梅雨が明けて、日差しが眩しいと感じるようになつてきた頃、いつものように河原に降りてぼんやりと佇んでいた。いつもと違うのは、まだ日が沈みきっていないこと。大学が早くに終わって、手持ち無沙汰のまま、ついつい足を運んでしまっていたのだ。

山間に沈みゆく夕日と、たくさんの宝石を鏤めたように輝く川面は、夜とはまた違った美しさがある。煙草に火を灯して、変わりゆくことについて考えてみようかな、と思つていたときだつた。

「おや、今日は早いですね」

河原沿いの道から、少年が私を見下ろしていた。

「たまには夕焼けもいいものね」

少しだけ右にずれて座り直す。少年はふと口元を緩めて、私の左隣に腰掛けた。

「何か、考え方でも？」

「まあね。変わらぬ」とついて、考えよつかと思つていたところ

「」

「成程、面白そうですね」

「折角だから、一緒に考えてみる？」

「ええ。ならば、そうですね。夕日が沈み、空の色が変わっていく様を眺めながらといつのば、どうでしょ？」

低く、よく通る声が心地良い。そうね、と眩いで、じろじろと寝転がつた。視界がオレンジに包まれて、土と草の匂いが鼻腔をくすぐる。

「オレンジ一色なのに、そのオレンジがそれ違う。グラデーションがかつているし、薄い雲はマーブル模様にも見えるわね」

「ええ……そして、段々と色合ひが強くなっています。僕は色の変化を見極めるのが苦手なので、こうこうときは田を開じて、しばらくして開けてみるんです。すると、少しオレンジが濃くなっていますのがわかります」

「へえ」

ゆっくりと田を開じてみると、少年も田を開じているのだ

る。「ふう、と大きな溜息が聞こえた。

「けれど、変わりゆくことって、連續的な事象よね。目を閉じていたら、断続的な変化にしか、ならないんじゃないの。色の変化を見極めるのが難しいとしても、じつと見つめていれば、わかる気がするんだけど」

目を閉じても、口を開く」とは出来る。言葉を紡ぎ、煙草を吸つてみる。寝転がりながら目を開じて吸つ煙草も、ぐらぐらと世界が回るような感覚が味わえて面白い。

「……そうでしょうね。普通ならば、やうなのでしょう。ただ、僕は色盲でして。細やかな色の変化を、視認することができないのです」

思わず、目を開けて少年の顔を見る。私と同じように寝転がつていて、穏やかな表情で目を開じていた。

「すみません。お気になさらないで下さい。日常生活に支障をきたすレベルではありますんし、きちんと美しいものを美しいと感じることは出来ます」

少年が、また詠った。いつもと同じような堅く、心地よい声で。節もメロディもないけれど、短調のように聞こえた。とても綺麗で、優しいはずなのに、悲しい詩だった。

「私のほうこそ、『めん。無神経な質問だつたわ』

「いえ、当然のことですし、それに僕は障害だとも思っていません。僕だからこそ見れるもの、感じられるものだって、きっとあるはずですか？」

ぱちりと目を開けて、少年は笑った。

「変わりゆくものも、ほら、見て取れます」

少年は覗き込む私ではなく、その向こうにある空を見て呟いた。私も振り返り、先ほどよつも一層濃くなつたオレンジ色の空を眺めた。

「ああ、本当ね。凄くよくわかる」

「変わりゆく様をじつと眺めることができなくとも、変わりゆく」

とを知ることは出来ます

「……けど、知つてみたいと思わない？ 徐々に変わりゆく、その様を」

「……そうですね。できれば」

「私が、教えてあげる」

そう。目に見えなくとも、知ることは出来る。少年のように詠うことはできなくとも、私だって言葉は知つている。

「空、眺めていて」

そう言つて、私も空を眺める。いや、じつと見つめる。微かな変化のその一つ一つを注意深く。

「ゆつくりと、夕日の方から、色が濃くなつていいく。じわりと、じわりと。染みこむようでもあるけれど、どちらかといつと、浸透していく感じ。雲も少しずつ、陰影がはつきりとしていく。全てが同時に。ゆつくりと、すくなくゆつくりと

ひどく拙いけれど、私は詠っていた。熱に浮かされたように。少年と同じよう。同じように。少年と一緒に歌う。成程、言葉で感じじるのも、できるのですね」

少年はにっこりと、屈託なく笑つた。何故だろうか、あどけないはずなのに、とても優しく、大人びた表情に見えた。

七月の半ばを過ぎた頃、私は虫除けスプレーを買った。微香性タブを見つけるのに、少し苦労した。

ここにところ、少年に会つていなかつた。期末テストの時期であるし、仕方のないことである。私はレポートを幾つか抱えており、久しぶりに少年の意見を聞きたいと思っていたのだが、生憎と連絡手段を持ち合わせていなかつた。私も少年も携帯電話を持ってはい

るのだが、番号を交換していない。いや、それ以前にお互いの名前も知らなかつた。

蒸し暑い夜の河原で、溜まつたレポートを如何に処理していくか考える。しかしどう考へても、片つ端から書き上げていくしかなく、必要な文献も調べはついていた。だが、書き進める気がしなかつたのだ。議題はいつの間にか、如何にしてやる気を出すかということにシフトして、その答えは中々見つからなかつた。

いたずらに煙草の本数だけが増えていき、じつとつとした闇が肌に張り付いた。

「ああ、もう

ちつとも考へることは出来ず、苛立ちだけが募つてゆく。美しいと感じてきたはずの景色も、今は不快に感じた。

今日はもう帰つて寝てしまおつか。そう思つて腰を浮かせたときだつた。

「今宵は、随分とお悩みのようですね」

闇の向ひから、低くて、よく通る声がした。続いてお馴染みの学生服姿が現れる。久しぶりに見る少年の姿だつた。

「こつも暑いと、考へもまとまりませんね。少し、歩きませんか？」少年はすいと自然に手を差し伸べて微笑んだ。私は何故か毒氣を抜かれたような気分になり、差し出された手を取つて立ち上がる。初めて少年と触れたのだと、すぐに気付いた。

「じりりと寝転がるのも良いですが、散歩も中々なものですよ」

「知つてゐる。最初は散歩のつもりで來たんだから」

今日ではなく、まだ桜の咲いていたときの話。私は、散歩でもしよつとこの河原にやつて來た。川縁に座らせたのは少年なのだ。

「それにしても、暑くないの？」

最早、トレーデマークと言つても差し支えのない、学生服を見て尋ねる。もう衣替えの季節も過ぎ、普通は半袖のシャツを着ている頃だらう。

「好きなんですよ。学生服。我ながら、よく似合つてこると想つたの

ですが

少年にしては珍しい言葉だった。私は少年をゆっくりと眺めながら、軽く頷いた。

川の流れに沿つて、ぶらぶらと歩く。少年は隣で私の歩幅に合わせて、私と同じくぶらぶらと歩いていた。

少年は細長い。背が高いと言つよりも、長い。肩幅が狭く、痩せぎす。そして、それを恥じるように背中を丸めていた。

星は少なく、風は凪いだ。それでも、さつきまでの鬱屈した気分は、いつしか消えていた。

「最近、あまりここに来なくなつたわね」

見上げるような形で、少年に話しかける。少年は首を少し傾けて、私を見下ろしながら「ええ」と頷いた。

「期末テストがありますから、一応勉強です。もっとも、受験生なので本当はここに来る暇は無いはずなのですが」

「へえ、受験生か……懐かしい響きね。志望校は？」

「すぐそこの城南大学です」

「……ふうん」

どくんと、胸が弾んだ。私の通う、大学の名前だった。

「大学生、ですよね？」

少年が言葉を途切れさせながら尋ねる。

「ええ。そう、だけど？」

私の言葉も途切れた。

「もしかして、城南大学に？」

「ええ。そう、だけど」

凧いでいた筈の風が、さわさわと吹いた。髪が揺れる。

「……良い香りですね」

少年がぶつきらぼうに呴いた。はて、何のことだろうと首をかしげて、出掛けにふきかけた虫除けスプレーに思い至る。フローラルの香り、だったか。

「ありがとう」「う

そう言つたきり、口をつぐむ。少年も口を開くことなく、ただ何となく景色を眺めながら河原を歩き続けた。大学の話もそれきりで別れ際に「それでは、また」「ええ、また」という言葉を交わしただけだが、気まずかったわけではなく、むしろ穏やかで、心地よい時間だった。

帰宅してから気付いたが、少年と歩いている最中、私は一本も煙草を吸つていなかつた。

5

夏が過ぎ、ようやく過ごしやすくなつてきた。

日中はまだ暑さを感じるもの、夜にもなれば涼しい風が吹き、散歩にはつづつつけの時期とも言える。

煙草に火を灯して、久しぶりの散歩と洒落込む。夏休みの間、実家に帰省していた所為で、一ヶ月ほど少年に会つことが出来なかつた。

下宿先に着いた頃には夜半を過ぎており、荷物を置いたなり、すぐ河原に出る。数時間の電車旅に凝り固まつた身体をほぐしながら、相も変わらずぶらぶらと歩いた。

夜空には三日月が淡い光を帶びて浮かんでいる。風が芝を揺らして、やあ、と音を奏てる。懐かしいような、でもやはり変化のある、いつもの河原だった。

「佳い夜ですね」

そして、彼もまたいつもどおり。学生服を着て、銀縁の眼鏡をかけていて。胸の奥をくすぐるような低い声も、理知的な瞳も。十八の夏を過ごしたとは思えない、白い肌も。風に微かに揺れる前髪だけ、少し伸びていた。

「眞面目に勉強するということを、長らく忘れていました。受験勉強というよりも、脳に知識を詰め込む準備運動に、夏休みを使ってしまった感じですね」

少年は苦笑しながら、私の右隣に座った。夏の頃よりも、少しだけ距離が縮んだようにも思える。

「私は、実家に帰つて、ゴロゴロしてただけ」

「へえ、では一人暮らしをしていたのですね」

「ええ。そうでなければ、流石にこの時間に外に出でないわよ」

一人暮らしをしている。そんなことも少年に言つていなかつた。不思議なことだ。既に半年近くも言葉を交わしているのに、お互にことを、ほとんど知らない。名前も、電話番号も。

否、知つているのかもしれない。背が高くて、瘦せていて、学生服をいつも着ていて、銀縁眼鏡をかけていて。整つているが地味な顔つき。河原で物思いに耽るのが好きだということ。色盲であること。そして、私の通う大学を目指していることも。

まだある。フローラルの香りが好きで、とても面白い考え方をする。言葉遣いは丁寧で、ぶっきらぼうな口調のときは、少し照れている。あつとロマンチストで、根は熱血漢

「ねえ」

名前を、知りたいと思つた。彼を少年と呼ぶことがひどく躊躇わためられた。

尊敬できる一人の人間を、子供扱いしているように呼ぶのは、趣味じゃない。

「そういえば僕たちは、お互いのことを、ほとんど知らない今までしたね」

私が問い合わせようとするのを遮るように、じつと私を見て少年が呟いた。

「大学でお会いしたときに、名前を知らなければ声をかけるのに自由しそうです。よければ、お名前を」

……本当に、不思議な少年だ。こっちの考えを読んでいるような

話し方をしてくれる。

「気が早いわね。合格の報せを聞いてからでも遅くないわよ？」

「まあ、背水の陣の一つとして。見得を切つて、不合格でしたと言つわけにもいかないでしょ」「う

ひゅう、と風が鳴つた。少年はこつこつと笑つて、私を正面から見据えていた。

「……鹿子。かのこ 南鹿子みなみ よ」

なんとなく恥ずかしくて、田をさらして、ぶつきらぼうに答える。その仕草が、どこか少年を真似しているような感じで、余計に恥ずかしくなつた。

「鹿子さん……綺麗な名前ですね」

少年の低い声で名前を呼ばれた途端、どくんと心臓が跳ねた。

どくん、どくん、どくん。

そのリズムは、とても恥ずかしくて、そして、心地よい。

「……そつちも、名前教えて。後輩になる男の子を、いつまでも少年なんて呼べないし」

煙草に火を灯して、ゆつくりと少年に尋ねる。胸一杯に煙を吸い込むと、少し落ち着いた。

「参りましたね。これじゃあ、ますます合格しなければなりませんよ」

少年はそう言って笑い、ゆつくりと三面を見やつた。

その様子をじっと眺める。少年の横顔が好きだ。眼鏡越しではなく、直に彼の理知的な目を見ることが出来るから。

「背水の陣、でしょ？」

「……そうですね」

少年の目が、私を捉える。穏やかな表情であるのに、瞳だけが力強い。最近知ったことだが、彼は目に感情が良くなれる。

「高木、聖人まさと です」

ふいっと目をそらして、それでもほつきりと少年

否、聖人は名前を告げた。

「へえ……じゃあ、聖人つて呼ばうかな」

私も、名前で呼ばれたことだし。

6

肌寒くなつてきただらうか。

冬が近付くにつれて、聖人は河原に姿を見せなくなつていった。

受験生である。仕方あるまい。

私は、逆に足繁く通つている　　といふか、毎日河原に赴いている。元より北国育ちで寒さには強い。

今夜も一人、河原を歩く。

すっかり葉の落ちた桜の木は、やはり来るべき春に向けて、その内に胎動を秘めているのだらうか。寒さにじっと耐えているようにも見える。

澄んだ空氣に煌々と瞬く星は、冬が一番美しい。川面は、相変わらず滑らかな光を見せている。シルクのようだと、ふと思つた。

聖人はいない。十一月の半ばから通い続けているが、十二月に入つても、姿を見せなかつた。

「……寒い」

厚手のコートを羽織つてきたのだが、さすがに三十分も河原にいると、体の芯の方から冷えてくる。寒さには強いはずだつたのだが。氣を紛らわせるように、コートから煙草を取り出して、呑める。火を灯すと、寒さが少し和らいだ。

今宵は満月。久し振りにと、月に向かつて紫煙を吹きかける。

「冬に朧月つてのも、あんまり似合わないわねえ」

適当に腰を降ろして、煙草を揉み消して、ため息をつく。最近、独り言が多くなつてきているような気がする。

聖人が、居ない所為だらう。彼の落ち着いた、低くて良くなつる声が聞きたかった。堅い口調で、詠うように語つて欲しい。

聖人に、会いたかった。

理由は、もうわかつている。いつからかはわからないが、私は聖人のことが好きになっていた。

会えないとと思うほど、会いたくなる。そのたび、どくんと胸が高鳴り、脳裏に笑顔が浮かぶ。息苦しささえ覚える。恋い焦がれるとでも言うのだろうか。私には似合わない言葉だ。だけど、その言葉が、今の自分に滑稽なほど当てはまる。

「聖人　会いたい」

口に出すと、顔から火が出るほど恥ずかしくなる。その一方で、ますます会いたいと思ってしまう。

「ああ、もう。本当に、似合わないなあ」

がしがしと頭を搔いて、煙草をくわえる。火を灯して紫煙を燻らせると、ふと笑みが零れてきた。

くすくす。ふふ。ははは。あはははは。

馬鹿らしい。やはり、滑稽だ。私には似合わない。恋も、笑い声も。ましてや、聖人なんて。

じつして煙草を燻らせて、ぼんやりと川面を眺めていれば良かつたのだ。恋なんてしなくて、楽しかった。聖人とどうでもいいことについて眞面目に語らっているだけで、良かつたのに。何故、好きになってしまったのだろう。もう、それだけじゃ満足できなくなってしまった。隣に座っているだけじゃ、嫌だ。触れ合って、抱きしめて欲しい。キス、したい。

「……はあ。もう、何考えてるんだか」

本当にどうかしている。中学生でもあるまいし。妄想して悶えるなど、馬鹿らしいでは済まない。ただの馬鹿だ。

今頃、聖人はきっと受験勉強に勤しんでいるはずだ。ここには来ない。私は、それをこつそり応援してやるべきなのだ。ここで、わざわざ凍えながら待つ必要なんてない。家に帰つて、暖を取つてからでも、遅くはあるまい。

「……寒い」

煙草を持つ手が、震えてきた。いよいよ、限界だろ。携帯電話を取り出して、時間を確認する。河原に来て、一時間も経っていた。

ゆづくじと立ち上がる。家に帰つたら、まずは珈琲だ。口が曲がつてしまつぐらに苦いのを淹れよう。

歩を、進める。くわえ煙草で、後ろ手に組んで。ふらふらと。

「鹿子さんっ」

もう、当分来ない方が良い。そう思つた途端、背中から声がした。いつもより弾んでいたが、低く、よく通る声だつた。

「すみません。本当はもう少し早く来たかったのですが、せっかく家族が宴を開いてくれていて、主賓うたげが抜け出すわけにも行かなかつたのです」

「へ……？」

開口一番の言葉に、私は面食らつた。

一体、少年は何を言つているのだろう。今日は何か、特別な日だつたのだろうか。

「……あれ？」

私の様子を見て、少年は拍子抜けしたような様子だつた。今日の少年は、どこか変だ。勉強のしすぎで、ノイローゼにでもかかつたのだろうか。

「……ん？」

ふと、ひつかかりを覚える。勉強……受験……そして、宴。

「あ、ああ！」

聖人は、受験生である。その聖人が宴の主賓となるなら、答えは一つしかない。

「合格、おめでとう」

いつしか手だけではなく、身体が震えていた。身を切るような風が、ますます体温を奪つていぐ。

寒い。だけど、どうしてだろう。聖人の顔を見た途端、今まで以

上に胸がどくどくと脈打つて、心が温かくなつた。

「もしかして、ずっと待つていてくれたのですか？」

「え、いや、そうでもないけど」

「でも、震えています。手も、冷たい」

聖人はそう言つて、私の手を握つた。かじかんでいた指先が、温もりに触れる。くわえていたはずの煙草が、いつしか足もとに転がつていた。

不思議だと、思った。

手が触れるだけで、どうしてこんなにも、動悸のように胸が高鳴るのだろうか。どうしてこんなにも、聖人のことが好きだと感じるのだろうか。

もう、駄目だ。何も考えることが出来ない。感じるのは、うるさいぐらいの鼓動と、指先の温もりだけ。

氣付けば、吸い寄せられるように、聖人の胸に飛び込んでいた。

「……鹿子さん」

頭の上から、聖人の声が聞こえる。相変わらず低くて。でも、胸が潰れてしまいそうな、声だった。

聖人の手が、私の手から離れる。それだけで、急に不安になつて、身体がびくりと跳ねた。

「鹿子さん」

不安を和らげてくれるよう、聖人はそつと、包み込むように私を抱きしめてくれた。

どくどくと、聖人の胸の音が聞こえた。私の胸と同じくらいに、早鐘を打つように高鳴つていた。

「鹿子さん」

ぎゅっと、聖人の腕に力が籠もある。それが、ただ嬉しかつた。

「……聖人」

そつと、私も聖人の背中に腕を伸ばす。学生服越しに、聖人の身体を抱きしめた。

「……やだ、私より細いんじゃないの？」

思つていたよりもずっと細くて、思わずそんな台詞を口にしてしまつ。

聖人はそんなことはないですよと呴いて、照れたように笑つた。

再び、河原に腰を降ろす。

寒くはない。何故なら、聖人が隣にいてくれるから。いや、それだけではない。寄り添うように、肩を抱いてくれているから。ずっと、二人とも喋らなかつた。ただ、側にいるだけなのに、幸せだと感じた。

あんまりどきどきと、わくわくと身も心も浮つくものだから、思わず煙草に手が伸びた。

「……ふう」

妙な話だが、煙草の味も一層美味しいと感じてしまつ。御都合主義だと笑われるかもしれないが、前言を撤回しようと思つ。恋をしてよかつた。聖人を好きになれて、よかつた。

聖人の横顔を眺める。聖人も、私を見ていた。

「……鹿子さん。ひとつ、お願ひがあります」「ん。なあに？」

「僕にも、煙草をいただけませんか？」

へ、と声をあげる。聖人は、煙草を吸いたいとは思つていないと、春に言つていた氣がするのだが。

「別に良いけど。私は、キツくて重いわよ」

煙草を取り出して、聖人に渡しながら尋ねる。聖人はどうもと言つて煙草をくわえ、苦笑した。

火を灯してやる。聖人は不器用に吸つて、軽くむせた。

「大丈夫？」

「え、ええ。いやはや、鹿子さんは、ずっとこれを吸つていたのですね」

聖人は涙目になりながら、それでも煙草を吸つた。上手く肺に入つたのか、むせなかつたが、今度は不思議な顔をした。

「やつぱり、やめなさい。捨てていいから」

「コートから携帯灰皿を取り出して、聖人の前に出す。しかし、聖人はなおも煙草を離そうとはしなかつた。

「……すいません。でも、吸ってみたかつたんです。鹿子さんが吸つている煙草を。好きな人の、真似がしたくなつたのと……」

不覚にも、聖人を可愛いと感じてしまった。いじらしいというか、妙なところだけ子供っぽいというか。

「それに、煙草の味が相殺できるかな、と。その、キスのときには」「えっ！？」

驚いて振り向く。聖人は、じつと私を見つめていた。

頬が、微かに朱に染まっている。困ったような、やはり可愛い目をしていた。

「……名案かもね」

聖人らしい、面白い考え方だと思った。

最後に煙草を思い切り吸う。聖人も、真似するように吸つた。

二人で同時に月に向かつて吐く。二筋の紫煙が絡み合い、朧月を作り出す。

そして、私は聖人を見上げて、ゆっくりと目を閉じた。

(後書き)

拙作を読んで頂き、ありがとうございました。

日頃から、ラヴコメばかりを書いており、このような女性視点の恋愛小説を書くのは、ほぼ初の試みでした。

特に、これと言った事件もなく、順調に歩み寄つた一人でしたので、これと書いた盛り上がりこそありませんでしたが、一人を幸せにできたと思います。

よろしければ、御感想のほう、よろしくお願ひします。

尚、タイトルの天鵞絨てんがじゆは、ベルベット。衣類に使われる布の一種です。紫朧は造語です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0053c/>

川は天鷲絨、月は紫臘

2010年10月8日13時56分発行